

# リハチヨフ、イヴァン・フョードロヴィチ 「艦隊司令長官、学者、人間」

ワジム・クリモフ

リハチヨフ、イヴァン・フョードロヴィチの名は、日本では一九世紀後半の極東の国際関係を研究する歴史学者の間、さらには何よりも対馬事件との関連において、極めてよく知られている<sup>(1)</sup>。これに関しては、ロシアでも同様に過去も現在も著作がなされている<sup>(2)</sup>。

本稿では、焦点をリハチヨフ自身に絞り、その行動を生涯にわたって注目することとする。その全貌は一冊の研究書にまとめるに値する。リハチヨフはロシア及びロシア海軍の歴史に極めて深い足跡を残した。イヴァン・フョードロヴィチ・リハチヨフは、すばらしい系譜を持つ、ロシアの尊敬すべき古い貴族層に属する。リハチヨフの家系は皆、文官、武官、学芸、学術いずれの分野であれ、祖国に身を捧げている。全員、唯一の例外なく、大きな仕事をなした。幼少の頃より励み、毎日勉強をし、学問、芸術を尊重する環境で育ち、無為や空虚な時間の浪費を知らない。

父はフョードル・セミョーノヴィチ・リハチヨフ（一七九五—一八三五）。カザン県の地主貴族、そのまた父であるセミヨン・アレクサンドロヴィチの意志により貴族にとつては榮譽とされる近衛重騎兵連隊【Kabaieprapickii noik 大貴族出身者からなる近衛重騎兵連隊】に勤務するために、一八一五年ペテルブルグへ遣わされた。勤務は成功し、一八二二年騎兵大尉まで昇進、聖ウラジミール四等勲章を授与された。しかしやがて、多くの上官や友人等の説得にもかかわらず、妻グラフィ

ラ・イワノヴナ・パナエヴァの執拗なまでの求めにより、長年上々に積み重ねた職務を捨てる。一八二二年、この若い夫婦はカザン県のポリャンキに移り住んだ。フョードル・セミョーノヴィチは父親の管理が悪いために荒廃した所有地の建て直しを始め、スバスキー郡の貴族代表に選ばれ、祖父アレクサンドル・ロギノヴィチ・リハチヨフ（一七五三？—一八一四）の仕事を引き継いだ。一八〇七年から一九一一年までカザン県ママディシユスキー郡の貴族代表、大変な愛書家、古銭収集家であった<sup>(3)</sup>。フョードル・セミョーノヴィチは本や雑誌を取り寄せ、古い時代のありとあらゆる種類の武器、キセル、パイプを収集してコレクションとした。フョードル・セミョーノヴィチはかなり若くまだ四十代にして、一八三五年一〇月一四日古式に則り【死に臨む儀式がある<sup>(4)</sup>】、肺炎で死去する。後にはたくさんのおい子供たちが残された<sup>(5)</sup>。

○ イヴァン・フョードロヴィチ・リハチヨフの弟、古銭収集家、考古品収集家、ロシア帝国考古学協会正会員。コイン、家族肖像画、絵画、版画、陶磁器、十字架、アイコン、武器を極めて熱心に収集する。その死後素晴らしい蔵書が残されたが、稀覯本や珍しい文書が保管されていた<sup>(6)</sup>。

フョードル・セミョーノヴィチは他界する一年前に、父に倣い、子息イヴァンを近衛重騎兵連隊ではなく海軍の学校に入れることを決意する。

父は皇帝ニコライ一世に願ひ出た。

「英明にして偉大なる皇帝、絶大なる全ロシア君主、ニコライ・パヴロヴィチ陛下。ロシア貴族・退役近衛二等騎兵大尉フョードル・セミヨールノヴィチ・リハチヨフは、子息イヴァンを海軍学校に入学させて頂くようお願い申し上げます」<sup>(7)</sup>。

その際父は、子息イワンについて「現在七歳で、ロシア語の読み書き、算数、フランス語とドイツ語は読みを習得している」ことを保証し、「私の嫡出子で、そのことの証明書を添えます」と記している。請願書は、海軍学校長 I・F・クルーゼンシュテルン海軍中将に提出され、次のように締め括られている。

「この請願書は、請願者である退役近衛二等騎兵大尉フョードル・セミヨールノヴィチ・リハチヨフが認め、署名を致しました。私の住所は、カザン県スパスキー郡であります」<sup>(8)</sup>。

この他に、子息は天然痘の接種を受けた旨の証明書が提出された。

「証明書。本証明書は、退役近衛二等騎兵大尉フョードル・セミヨールノヴィチ・リハチヨフの子息に対し一八二九年八月一〇日に与えられたもの。本官が天然痘の予防接種をしたことを証明し、ここに署名する。スパスキー郡軍医長クラメル」<sup>(9)</sup>。

その他に父は、自身、及び自身の嫡出子に付き、貴族の出身であることを証明する複数の書類を請願書に添えている。

「一八三三年七月一三日カザン県議会において、近衛二等騎兵大尉フョードル・セミヨールノヴィチ・リハチヨフの請願書の聴問が行われたが、その際請願者は、彼の息子イヴァン、ボリス、ロギン、アンドレイ、娘エカチェリーナの出生についてカザン県宗務局から下付された出生証明書五通を提出し、子供たちを自分の家系の一員としてカザン県の貴族台帳に登録することを要請した。カザン県宗務局のこれら証明書によれ

ば、近衛二等騎兵大尉フョードル・セミヨールノヴィチ・リハチヨフの嫡出子として記載されているのは、子息イヴァン（一八二六年三月三日生）、ボリス（一九三〇年一月一九日生）、ロギン（一八三一年二月九生）<sup>(10)</sup>。：」。

貴族の出自であることを証明する提出書類からは、「貴族リハチヨフ家は、一七九三年のカザン県議会の決定により貴族台帳第四部に登録されたこと」、および、リハチヨフ家がポーランド貴族を出自としていることが判かる。「古代ロシア暦」六九三四年【西暦一四二六年】に小地主貴族で正教徒のアレクセイ、世俗名オレグ・ボグスラヴィチ・リホフスキーがポーランドを出てモスクワ【公】国に来る。ロシアに来てからの彼はリハチと呼まれ、そこからリハチヨフ家が始まった」<sup>(11)</sup>。

しかしながら、権威ある百科辞書『 Brockhaus・エフロン百科事典』は、オレグ・ボグスラヴィチはリトアニアの出身としている。「リハチヨフ家は古いロシアの貴族である。リハチヨフ家の祖はオレグ・ボグスラヴィチ・リホフスキーであるが、ロシアに来てからはリハチと呼ばれる。リトアニアの小地主貴族で正教徒であった彼は、リトアニアを出るとヴァシーリー・チョームヌイ【盲目公、モスクワ大公ヴァシーリー一世の次男、モスクワ大公ヴァシーリー二世（一四一五—一六二、在位二五—一六二）大公の下に行った」<sup>(12)</sup>。

言い換えれば、ポーランドの姓リホフスキーから、それを短くしたりハーチが最初に作られ、その後、ロシアの姓として一般的な接尾辞・evが付け加えられリハチヨフとなったということである【ロシア人の名前らしくしたということ。アクセントがある場合の発音はこの綴りのままでovと読む】。

以上から、海軍幼年学校に入るためには次のことについて証明することが求められていたことが分かる。(一) イワンは嫡出子であること、

(二) 貴族出身であること、(三) 初等教育を受けていること、すなわち、ロシア語の読み書き、算数、フランス語とドイツ語の知識を習得していること、(四) 天然痘の接種を受けていること、(五) 両親・子息共に正教の信仰者であること。

イヴァン・フォードロヴィチの海軍勤務歴を見ると、およそ海軍士官の誰もが手に入れることが出来るわけではないような出世ぶりの印象を受ける。勤務歴を要約するのは意味がないので、以下そのまま引用することにする。

リハチヨフ、イヴァン・フォードロヴィチの略歴

一八三九年三月八日 海軍幼年学校入学。

一八四二年二月九日 士官候補生昇進。フリゲート艦パルラーダ号乗艦フィンランド湾航海。

一八四三年一月二三日 海軍少尉任官、将校としてそのまま海軍に在籍。<sup>(13)</sup>

これについて補足しておかなければならないことは、リハチヨフは海軍幼年学校での教育を優秀な成績で終了し、更に訓練を継続するために海軍将校として残ったということである。

一八四四―四九年 バルト海艦隊から黒海艦隊に移動。軍艦ヴァルナ号、コルベット艦イフイゲニア号乗艦、セヴァストーポリ攻防戦に参加、同コルベット艦でアブハジア沿岸【黒海北岸】を遊弋。

一八四五年 輸送船スバシ号でアブハジア沿岸を航海。

一八四五―一八四七年 スターナー艦ザビヤカ号乗艦セヴァストーポリからコンスタンチノーブルへ、同地からエーゲ海、地中海へ廻航、その後、蒸気艦シラチ号でコンスタンチノーブルからセヴァストーポリへ戻る。

一八四八年四月一日 海軍大尉。フリゲート艦ミディア号でセヴァス

トーポリへ、その後蒸気船ゴニエツ号でアブハジア沿岸へ。

一八四九年 軍艦ヴァルナ号で黒海東岸遊弋、その後黒海艦隊からバルト海艦隊へ。

一八五〇―五一年 コルベット艦オリヴツツ号でクロンシュタットからペトロパヴロフスクへ、同地から同艦を指揮しノヴォアルハンゲリスクへ廻航。

一八五二年一月八日 海軍少佐。黒海艦隊へ移動。輸送船バイカル号でペトロパヴロフスクからアヤン【ユーラシア大陸のオホーツク海に面した港】へ、同地から陸路セヴァストーポリへ帰着。

一八五四年 蒸気フリゲート艦ベッサラビア号に乗艦、セヴァストーポリ防衛戦に参加、パンフィロフ海軍少将旗下蒸気艦隊対英仏蒸気艦三隻の海戦に参戦。

一八五四年一二月六日 海軍中佐。

一八五四年九月一三日―五五年八月二七日 セヴァストーポリ防衛戦に参加。八月二六日 頭部挫傷。

一八五五年一〇月一日 第三六艦隊陸戦隊司令官。

一八五六年 聖スタニスラフ二等勲章(帝王冠徽章・劍徽章附)受章。

一八五六年八月二六日 海軍大佐。

一八五七年 檣頭旗<sup>(14)</sup>を掲げ、スクリュー・コルベット艦ウダフ号乗艦、スクリュー・コルベット艦ルイスイ号、スクリュー・コルベット艦ズブル号分艦隊を指揮しクロンシュタットからセヴァストーポリに廻航。

一八五八年三月一〇日 元帥コンスタンチン・ニコラエヴィチ大公の副官。蒸気フリゲート艦リューリック号乗艦、大公の檣頭旗を掲げ、フィンランド湾諸港を航行。

一八五九年 フリゲート艦グロムボイ号乗艦、コンスタンチン・ニコラエヴィチ大公檣頭旗を掲げ地中海航行。トルコのメジイディイエ

【Merkitine】勲章受章。九月八日 海軍教育委員会、海軍建艦技術委員会委員（大公副官は継続）。

一八五九年 聖ウラジーミル四等勲章（綏付）受章。将校勤続一五年勲功による。

一八六〇—六一年 自己の檣頭旗を掲げ、スヴェトラナ号乗艦、クリッパ艦分艦隊を指揮し、シナ海、日本海航海。

一八六〇年 聖ウラジーミル三等勲章受章。

一八六一年四月一七日 海軍少将に昇進。一七六二年告示を基礎に元帥コンスタンチン・ニコラエヴィッチ大公付に。

一八六二年 予備艦隊編入。

一八六三年八月八日 復役、クリッパ艦分艦隊を指揮しバルト海遊弋。

一八六四年四月一七日 聖スタニスラフ一等勲章（劍徽章附）受章。

一八六四—一八六六年 自己の檣頭旗を掲げ、蒸気フレガート艦ウラジール号乗艦、フィンランド湾で装甲艦艦隊を指揮。

一八六四年八月三〇日 コンスタンチン・ニコラエヴィチ大公の幕僚。

一八六五年 スウェーデン・オラフ勲章、デンマーク・ダネブログ勲章受章。

一八六六年 聖アンナ一等勲章（劍徽章附）受章。一月二六日 海軍技術委員会砲兵部会委員。

一八七一年 聖ウラジーミル二等勲章受章。

一八七四年一月一日 海軍中将。

一八七七年 白鷺勲章受章。

一八八〇年 アレクサンドル・ネフスキー勲章受章。

一八八三年 アレクサンドル・ネフスキー勲章に飾るダイヤモンド徽章下賜さる。

一八八三年八月二三日 退役。

一八五六年、六〇年、六五年 『海軍雜誌 (Морской сборник)』に「ウラジーミル・アレクセエヴィチ・コルニローフ提督について」(五六六年)、「中国からの書翰」(六〇年)、「装甲艦実践航海概観 (一八六四年)」(六五年)<sup>(15)</sup>を发表。

上記勤務歴にはないが、一八六七年リハチヨフは英仏の海軍駐在武官を務める。この任務は一八八三年八月二六日退役するまで一七年間継続して勤めた。数日後の九月一日、年金は年間約二五八七ルーブルと決定され、居所であるバリでロシア大使館を通し受給する<sup>(16)</sup>。

性格やもの見方に大きな影響を与えたのがクリミア戦争（一八五三—五六）である。V・A・コルニローフ【当時中将、艦隊司令長官】自身の副官を勤めた。当時二七—二八歳。セヴァストーポリ防衛戦でリハチヨフはセヴァストーポリ湾内でのすべての情報伝達に責任を持った。転送手段はすべてその指揮下にあった。セヴァストーポリ防衛戦での勲功により、通例より早く中佐、大佐に昇進。聖スタニスラフ二等勲章、聖アンナ二等勲章、受章<sup>(17)</sup>。同時に三国、イギリス・フランス・トルコと戦ったこの戦争でのロシアの敗北は、彼の心に深い傷跡を残し、思想的に回帰し、失敗の原因を探求せざるを得なくさせる。いずれにしても、最も有意義な出版物はすべて、これらの考察の結果である。一八五六年『海軍雜誌』【“Морской сборник”】に論文を发表、セヴァストーポリ防衛戦の英雄であり、自分の師である「V・A・コルニローフについて」書く。一八八八年『ロシア海運』【“Русское судоходство”】誌上<sup>(18)</sup>、基礎となる学術著作「海軍軍令部の役割」を发表。敗戦の苦い経験を経、リハチヨフはロシアで初めて、海軍の戦略的指揮のために特別機関を創設することが必要不可欠であることを表明する。残念ながら、当時採用

(235) リハチヨフ、イヴァン・フョードロヴィチ（一八二六—一九〇七）「艦隊司令長官、学者、人間」（クリモフ）

に至らず、その考え方は高い評価を受けなかった。一六年後日露戦争の際、海軍戦略指揮に関するこの考え方は、ロシアにとっても他の諸国にとっても明白になった。一九〇一年リハチヨフは論文「クリミア戦争における黒海艦隊の役割とセヴァストーポリ湾における我國艦艇の撃沈（一八五四年）」を執筆した。しかしながら検閲のために出版することができなかった。ただ三年後、直しを入れ「セヴァストーポリで 五〇年前」と題名を変えて出版できた。その著作「海軍軍令部の役割」中にある「祖国の過ちや不備を祖国に対して覆い隠さず明らかにする精神を持つ者こそが、祖国をより多くかつよりよく愛している」との言葉は、苦難の末にイヴァン・フォードロヴィチ・リハチヨフにより得られたものである。

ロシア海軍が最初に太平洋に出現したのはリハチヨフと関連している。初めてリハチヨフが極東に現れたのは一八五〇年コルベツト艦オリヴツ号でクロンシュタットからペトロパヴロフスクへと遠洋航海を行い、一八五一年一〇月一四日同艦艦長、ノヴォアルハンゲリスクを訪れた。コルベツト艦オリヴツ号でリハチヨフは世界一周航海を行い、クロンシュタットを出港、大西洋を横断、ホーン岬では濃霧に遭い、太平洋に出て、露領アメリカとカムチャツカに滞在<sup>(18)</sup>の間、リハチヨフはゲンナジー・イワノヴィチ・ネヴェリスコイ（一八一三—一八七六）と知り合う。ネヴェリスコイは人員・資材ともに不足という、かなり厳しい状況下にあった。ネヴェリスコイはどうやら乗組員を追加任務の遂行のために使いたかったようだ。しかし、イヴァン・フォードロヴィチは自分に与えられた訓令の範囲外にすることを拒絶した。ネヴェリスコイはただそれだけなくこのことに言及している。

「七月一日（一八五一年 クリモフ注）ペトロフスク港にコルベツト艦オリヴツ号が到着、当艦はペトロパヴロフスク港に停泊した最初

の軍艦である。乗艦していたのはペトロフ、ラスグラツキー<sup>(19)</sup>両海軍少尉、ペトロパヴロフスク勤務を任命されていた。コルベツト艦艦長リハチヨフは、ザボイコ、カシエヴァロフ、露米会社首脳部、そしてムラヴィヨフ総督からの書類を見せ、どんなに遅くとも八月一日にはペトロパヴロフスクに着くよう厳命されている、探検のためには何も持っていないと言明した。リハチヨフ大尉はペトロパヴロフスクで水没死した優秀なコルベツト艦艦長I・N・スウシチヨフの後任としてコルベツト艦艦長の任務を引き継いだ<sup>(21)</sup>」

一八五三年、二七歳で海軍大尉の地位の時、短い間『海軍雑誌』【“Морское собрание”】の副編集長を勤める。その『海軍雑誌』には後年いくつかの論文を発表している。一八六〇年より少し前、リハチヨフは一海軍将校から艦隊司令長官となり再び極東水域に姿を現し、艦隊司令長官としての大きな一歩を踏み出す。一方、一八五九年一月に書いた「海軍の状況に関する覚書」の中で、リハチヨフは真の海軍軍人の養成のためには独立した艦隊による遠洋航海が必要不可欠であることを指摘し、また海戦の進捗において大きな影響を与えうる大型フリゲート艦の意義について述べている。

ロシアの閉鎖海洋にこれらの艦艇を保持することだけはならないと語り「そこでは陸封された魚の如くなる…、たとえ不必要だとしても絶えず遠洋航海を課すことが必要であり…その行動舞台はアムールへの往復のみに留めるべきではない…艦隊は太平洋、シナ海やインド洋といった、戦いになった場合、おのずと、戦功をたてることになる地域に置くべきである<sup>(22)</sup>」

艦艇の乗員たちはそういった航海を重ね貴重な経験を経ながら、自立した決定「自分たちの頭で考えろということ」を受け入れることに慣れ、サント・ペテルブルグの最高首脳部につまらないことで毎回伺を立て

ることなく、国家に対する責任を果たすことを学んで行く。さらに、元帥コンスタンチン・ニコラエヴィッチ大公に提出された覚え書きでリハチヨフは次のように指摘している。

「陸で生活をし、陸戦隊なり、行政なりの支配を自らに握っている海軍将校、提督は、真に海軍の利害の要請に従い海軍力を統率することはできない。二重状態は彼が自己の努力と思考を海軍のためにのみ捧げることの妨げになるであろう」<sup>23</sup>。

そして、リハチヨフの考えによると、もし、政府が、国家の利害を正確に認識し、正當に理解しているとすると、必ずや当該国家の海軍はしかるべきレベルに保持せざるを得ない。国家の威信、利害は、如何なる手段を使つても守り抜かざるを得ない。

「そのためにはいかなる手段が選択されるべきかは明白である。すなわち宣教、貿易、なかんずく海軍力、とにかくあらゆる関係を増強させ、そして最終的には、かなりの規模の兵力を常駐させることである。軍事力は国家に対する敬意を呼び起こし根付かせるものであり、その威力ある外観で、精神的にも商業的にも、常に我が国の利害を保持し、防御することができると。このように、海軍列強の一國との戦争の想定のみならず、たとえもし戦争が起らないとしても、より現実的かつ本質的な利害が、我が国に、当該海域での相当規模の兵力保持を促している。その海軍力の展開のためには、我々の考えでは、ステイションの長官の地位を設けることが必要不可欠であり、その例はすでに他の諸国に存在する。艦隊司令長官は、自身が当該地にいることにより、平時には我が国のすべての利害を監視し、当該地域の現況を十分に把握できるであろう一方、予め作戦計画を立てておくことにより、戦時にはおそらく、当該地域の兵力から最大限の利益を引き出すであろう」

さらに、自分の考えを發展させ、リハチヨフは、統括システムの改善

さらに強力な艦艇の開発と建造、常に、艦艇を新しくし、旧造艦を新艦に取り替える必要性を述べる。一方、新しいタイプの大形艦、すなわち覆蔽されたフリゲート艦、換言すれば、装甲フリゲート艦に着目する。重要なことは、ロシア海軍は近代的なフリゲート艦のそのような組み合わせを構想し、装甲艦隊創設へ踏み出したということである。「疑いなく、その点、すなわち、装甲艦隊において他国を凌駕できる国は、海戦で大きな優勢を得られる」。だがここに安心してはいけない。「海軍の技術が際限なく改善と再生する現代においては、他の国に遅れをとらない唯一の方法は、全ての国の先を行こうとする強い意志である」<sup>24</sup>。

リハチヨフが強調したのは、資金を節約してイギリスや他の国の後を追いついて現代型の艦艇を建造しても、海戦で負けてしまえば、すべての投資を一挙に失う可能性があるであろうということであった。一八六三年ポーランド蜂起とこれに関連した英仏の反撃の後、装甲艦を建造することが着手された。内政問題に邪魔をされることを恐れながら、ロシア政府はリハチヨフが助言したように、海軍維持経費、近代的艦艇建艦費に支出する厳しい財政経済政策を控え、装甲艦の建艦に着手した。リハチヨフはまた、バルト海で自身装甲艦隊を指揮し、ロシアの装甲艦隊の創始者となった。後年リハチヨフ提督は論文「装甲艦実践航海概観（一八六四年）」で装甲艦隊を指揮した経験を明らかにした。一八六四年四月十七日、装甲艦隊創設の際に發揮された努力と目的意識に対して、リハチヨフ提督は星徽章附聖スタニスラフ一等勲章を受章した。

一八五八年三月一日、三二歳でイヴァン・フョードロヴィチ・リハチヨフは海軍大佐として、コンスタンチン・ニコラエヴィッチ大公の副官となった。二人の間には強い信頼関係が出来上がっていく。元帥はロシア帝国、特に極東の外交関係に多大なる興味を持ち、それゆえ、大公の手元には、常に外務省から、一部はアジア局から、機密公文書

【конфиденциальные документы = confidential document】が送られていた。いつもそうであるようにコンスタンチン・ニコラエヴィッチ大公はリハチヨフとさまざまな問題について話し合い、個人的な意見を言うように求めた。当時英仏は中国で軍事政治的コントロールを打ちたてようとしていた。I・F・リハチヨフは、連合国が、可能性あらば、沿海州、アムール川以南の地域のロシアの立場の強固さを試そうとするであろうことを疑っていなかったし、これら地域については、まさに今ニコライ・パヴロヴィチ・イグナチエフが北京で交渉を行っているところであった。

一八六〇年一月初め、リハチヨフとともにクロンシュタットで定時巡検をしていた大公は、アジア局から至急便 [зреша = dispatch] を受け取った。一八五九年半ばから国境条約を締結するために中国にいたN・P・イグナチエフ少将のものもあった。交渉は難航し、実質的に行き詰った。イグナチエフは中国政府に圧力をかけるために、北京を去って東シベリアに戻り、国境付近で軍事力の誇示をする許可を求めた。リハチヨフはこの問題に対して、次のように自己の意見を述べた。「一方北京に留まるわけにはいかないが、他方シベリアに戻るわけにもいれない。というのは、東シベリアは十分な資金と軍事力がないし、北京からあまりにも離れていれば、軍事力の誇示は実効力を持たないからである。」それ以外にもイグナチエフの北京からの退去の時期はあまりにも不適當であった。ちょうどその当時、英仏が对中国共同遠征を準備していた。それゆえ、中国人が完全に打ちのめされ、大きな譲歩をするであろうことは予測に難くない。

ロシア公使は厳正な中立を守りながら、とはいえ現地中国を退去することなく、第三者として事件の進展を見守る方針をとる一方、必要な場合には、西欧列強との平和達成のために、仲介者として尽力をする用意

を示した。そして、最小の努力で、国境に関し中国との間に望ましい合意を得る。故にリハチヨフはロシア公使に中国から退去せず、まさにこの目的のために、これから中国海域に集結させるロシア艦隊の一隻に移ることを勧めた。元帥はこの提案が気に入り、アレクサンドル二世に奏上することを決めた。皇帝臨席の上、特別委員会の会議が開催された。皇帝はリハチヨフの論証に賛意を表した。次の日、大公はリハチヨフを自分の邸宅である大理石宮殿 [Мраморный дворец] に呼び、そこで、「当該問題提起者イヴァン・フォードロヴィチに対し、中国沿岸艦隊を集結させることを許す」との皇帝の意志が表明された。当時、ロシアは太平洋海域とそれに接する海洋にはコルベット艦一隻、クリッパー艦一隻、あといくつか小艦がいた。地中海からフリゲート艦が廻送されることが決定した。

一八六〇年一月二七日リハチヨフはサンクト・ペテルブルグを発ち、フランスに到着、そこで一月三一日マルセイユから上海に向かう蒸気客船に乗船、その後、極東へと向かった。上海でリハチヨフはフランスの蒸気船レミ号をチャーターし、クリッパー艦ジギット号と輸送船日本号の待つ箱館に向かう。四月一日ポシエツト湾のノヴゴロド・ガヴァニに軍事哨所にふさわしい場所を選定し、二ヵ月半の食料を補給しP・N・ナジィーモフ大尉を長とする一隊を上陸させた。リハチヨフはナジィーモフに、外国艦船、特に英仏船がもし現れた場合には、ロシアの旗を揚げ、近づいてくる英仏人に、ノヴゴロド湾とポシエツト湾はロシアの領土であると宣言するよう命じた。リハチヨフはこの際、ポシエツト湾はロシアの領土であると公式に宣言するとともに、責任は自分がすべて引き受けた。<sup>25)</sup>

一方彼の行動はムラヴィヨフ・アムールスキ伯の意向と一致していた。その内一八五九年一月一五日付け沿海州軍務知事に対する指令の

内容は以下の通りであった。

「英仏兩國により今回の対中国戦争になされている用意周到な準備は、閣下指揮下の小艦隊の全艦艇を直に海上に展開する準備を余儀なくさせております。：我が艦隊は：以下の主たる計画案を実行すべきであります。(一)ピョートル大帝湾のノヴゴロド港、ウラジオストク港において、小規模部隊のため二拠点を占拠し、防衛を固める。ペチョリンスキー湾【北直隸湾＝渤海湾】の英仏連合軍は早春、おそらく六月初めまでには、兩國の遊弋艦は我が国の南岸付近に現われるだろうから、我々の方ではそれまでにそこで待ち受け、その複数の箇所を部隊を駐屯させるべきである」<sup>(26)</sup>。

それ以外に、ムラヴィヨフ・アムールスキー伯に次のことが速やかに文書で伝えられた。

「ボシエツト湾のノヴゴロド港は、去る四月末、大公元帥の副官リハチヨフ大佐により確保された。リハチヨフは彼地の海岸に軍事哨所を建て、ロシアの旗を掲揚した」<sup>(27)</sup>。

一八六〇年一月二十九日付けでイルクーツクからムラヴィヨフ・アムールスキー伯はイヴァン・フォードロヴィチに次のように書いている。「最大級の満足を以って、迅速にかつ尋常ならぬ程早急に今春ボシエツト湾のノヴゴロド港を確保したとの知らせを受け取りました。この重大事を遂行し、とりわけ、太平洋における現在の状況とヨーロッパ人との相互関係の下で、極東での我が国の影響力という問題に関し、重要な功績を成し遂げられました。我がロシアが太平洋で獲得すべき将来の展望に向けての一三年間にも及ぶ私の絶え間ない努力は、私にある種の権利を与えてくれると同時に、貴官イヴァン・フォードロヴィチ殿にノヴゴロド港確保に対して心からの感謝をすることを義務づけるものです。ノヴゴロド港の確保は、貴官が副官の榮に浴している大公殿下の絶

えざる庇護と活動にその秩序と発展を負っている地域における政府の将来的展望の実行に向けて、大幅な前進を促すものであります」<sup>(28)</sup>。

一八六〇年四月末、リハチヨフはペチョリンスキー湾（渤海湾）ペイホー河付近に部隊を集結させることに成功した。このことに付き、イグナチエフに知らせると、イグナチエフは五月二〇日艦隊に到着し、リハチヨフと約二ヶ月半をともに過ごした。すべては基本的に、リハチヨフが予想した通りに進んだ。一八六〇年一月二日北京条約が締結された。一八六〇年一月二日（一四）日北京追加条約の名で知られているものである。<sup>(29)</sup>アムール・ウスリー地方の領有権はロシアに帰属した。イヴァン・フォードロヴィチは三四歳であった。海軍少将の階級を与えられ、聖ウラジーミル三等勲章を授与された。アレクサンドル二世は中国と条約を結んだりリハチヨフの功績を高く評価した。

にもかかわらず、I・F・リハチヨフ自身は、ロシアにとって有利な北京条約の締結に際してのロシア海軍の功績を世論が正当に評価しなかったこと、伝統的に陸軍大国であるロシアでは現在の世界における海軍の役割が過小評価されていることに不満を覚えていた。一八六一年四月九日付けの書簡の中で彼は、コンスタンチン・ニコラエヴィチ大公宛に次のことを認めている。

「艦隊司令官としてまたロシア人として私は、事態の順調な結末に関してロシアは、大使館の場所を艦隊上に移すという閣下のお考えそのものに、そして、閣下のご指示を遂行するに当たっての艦隊の精力的な努力に負っていることを今ここに閣下にご報告致すことを義務と思っております。また私は、四月から二月いっばいまでおおよそ友好的でなく伝染病の危険のある投錨地でひしめき合いながら、私の部下たちが自分たちの義務を立派にかつ誠実に遂行したことを閣下にご報告致さなければなりません。これについてはそれで留めておくことに致しますが、私は、

この事実がこのまま何人にも知られることなく、六〇年の条約に関してロシアは海軍に負っていることを世論が知らないまままで終わることを危惧しております。ロシアでは、国家級の人たちでさえ、海軍力の意義とその便益を信じず、理解もしていません。この点に関し、残念なことではありますが、私たちには大衆の目に止まるような、そして盲人にも分かるような説得的事例と証拠がさらに必要です。もし我々の真の、時には（例えば今度のような）困難な中で功績が今後に亘っても認められないようであれば、海軍の持つ有意義性に対する確信が国民の間に生まれることは決してないでしょう。そして、それなくしては海軍の発展も、世論の支持を欠いたものとなり、困難で不安定な企てとなるであります<sup>(30)</sup>」

丁度その頃リハチヨフは、最初は在箱館ロシア領事から、その後一部の日本の役人（姓は確定できなかった）から、イギリス人が自分たちの艦隊基地の候補拠点として対馬に関心を示していることを知り、イギリス人に先んずる必要があるとの考えを持つに至った。

一八六〇年五月二日イワン・フョードロヴィチは海軍元帥【コンスタンチン・ニコラエヴィッチ大公】に上申書を送り、その中で、同島を持つ戦略的意義について指摘し、また自らがイギリス人に先んずることを望んでいると強調している。中でも彼は、極東の勢力範囲においてロシアはヨーロッパにおけるのと同様の状況に遭遇することになり、ロシア海軍がオホーツク海と日本海に閉じこめられかねないことを記している。以下、状況に対するリハチヨフの見解をより正確に知るために、彼が述べていることを要約ではなく、そのまま引用する。

「ここから大洋に出るには三つの通路がある。サハリン島とマツマエ島の間のラペルーズ海峡、マツマエ島と日本本土との間の津軽海峡、そして日本と朝鮮の間の朝鮮海峡である。第一の通路にはアナワ湾が（ア

ニワ湾・クリモフ注）、第二の通路には箱館があり、第三の通路を支配しているのは海峡の真ん中に位置するツ・シマ島（ツシマ・クリモフ注）である。このような地理的位置から、我々にとってこれらの地点が持つ重要性が出てくるのであり、またそれによって、我々が何故にアナワと箱館に早い時期に注意を向けたかが説明される。それに対して、第三の最も重要な地点は特に注目されないうまま今日に至っている。これら三つの通路のそれぞれに、我々の新しい内海に通じる扉としての名称を仮に与えたとした場合、それらをより密接に比較するならば、アナワと箱館は脇扉に過ぎないと認めざるをえず、その真ん中に、見張りのごとくツ・シマ島が位置するところが主要な門となろう。事実そこには、我々が今後一度ならず何らかの役割を演じることになるであろう中国、主要な都市と軍隊がその領土の南部に集中している日本帝国の最も重要な地点、双方に至る最短経路が通っている。北の通路はいずれも太平洋に通じるが、そこは、数隻の捕鯨船以外には誰も訪れることのない最も閑散とした部分である。それに対して朝鮮海峡を抜けた先に広がっているのは極めて活発で豊かな往来と貿易に満ちた海である。もしもこれら三つの地点が強大な敵対国の手に入るようなことがあれば、それはロシアにとつて最も不利益な条件となろう。これらの地点が今後常に中立的なものであるならば、それは次善の選択となろうが、日本のような国家が中立であることは何ら政治的重みを持ち得るものではなく、決して尊重されることはないであろう。このことから論理的必然として次のことが言える。我々がヨーロッパで蒙っているような不利益な立場を今後忌避するため望まれることは一つ、これら三つの通路を、たとえすべてではなくとも、少なくとも、よりいっそう重要な通路を複数確保することである。敢えて私の意見を申し上げるならば、新しい獲得物を多少高い値段で購ったとしても、それは無駄なものとはならないであろう。その理

由は、それなくしては、西太平洋における我々の海軍の影響力を発展させる努力はすべて空しいものとなり、単に資金と時間と労力の無駄となるであろうからである」。

続けてリハチヨフは、この問題は交渉という方法によって解決しうると記している。その際の課題は、「イギリス人であれ他のいかなる国であれ、この点に関して我々の不利になるような主張を許容しないことであり、それは以下の方法で達成することができる。(一) 全島あるいはその一部を獲得し、皇帝陛下の領有とする、あるいは、(二) 少なくとも海岸の或る程度の場所を我々の倉庫、病院などのために譲渡させ、そこに我々の艦船と艦隊の滞在施設を建築する、あるいは少なくとも、(三) この島を今後全ヨーロッパ人に閉ざされたものとするよう要求する。この最後の点に関して日本人はおそらく喜んで賛同するであろうが、そのような約束が揺るぎないものと期待することは禁物である。【日本】政府の弱さとヨーロッパ人に対する恐怖心を考えれば、約束が将来にわたる保障とはまずならない。私の立場から言えば、私の権限は、艦隊の軍艦の一つを測量のためにツ・シマ島に派遣し、中国情勢が許せばただちに戻って私が行うことができるまで、測量作業を可能な限り長く続行させることのみである」<sup>31)</sup>。

リハチヨフは、はやる気持ちを抑えて、サンクト・ペテルブルグからの返事を待った。七月二六日にロシア帝国の首都から発送された書翰は、ようやく一二月二日になり届いた。元帥【コンスタンチン・ニコラエヴィッチ大公】は艦隊司令長官【リハチヨフ】の考えに同意した。大公は、外務大臣ゴルチャコフ公爵も臨席する中でリハチヨフの報告を読み上げたこと、皇帝はリハチヨフの考えの持つ価値を即座にご理解されたことをリハチヨフに伝え、次のように記した。「ゴルチャコフもその重要性を認めざるを得なかったが、例によって例の如く、このことが

政治問題に発展するのではないか、特に、それが原因となって日本と事を構えることになるのではないかと恐れていた。更に大公とリハチヨフは、「このことは、政治的条約としてではなく、海軍の取引としての性格を持つべきものである」という点でも意見が一致していた。

一八六一年三月一日侍従武官N・A・ビリレフ指揮下のコルベツト艦ポサドニク号が対馬海岸に到着した<sup>32)</sup>。三月二七日リハチヨフは査察に出掛けたが、その巡視結果に不満足であった。四月一六日リハチヨフは再び対馬を訪れた。今度はその目で確かめた結果に満足であった。勿論のことであるが彼は、ロシア艦の島での滞在を長期にわたって維持することは不可能であるとの報告を出した。リハチヨフは自分の意見をペテルブルグに伝えた。その内容は次のようなものであった。権利という観点から見た場合、対馬におけるロシア艦の停泊地問題に関するロシアの立場は弱く、江戸の政権(幕府)と交渉に入ることが不可欠であること、交渉の開始が遅くなればなるほど、日本側から同意を得にくくなるであろうこと、この件を秘密裡にしておくのは不可能であること、というものであった。彼は、大君の居城でロシアの立場をより積極的に主張するために、「信任使節」ができるだけ早く日本に派遣されるよう努力を重ねた。イギリス人は、対馬にロシア艦がいることに気付き、政治問題化した。

一八六一年一〇月一三日リハチヨフはサンクト・ペテルブルグに向けて出立し、一二月に首都に到着した。大公は彼を迎え入れ、皇帝とも率直な話し合いを持った。アレクサンドル二世は話し合いの最後に質問を一つし、それに誠実に答えるよう求めた。その質問というのは、ロシアにとり、対馬の基地はそのためにイギリスと決裂したり、場合によっては戦争に至る危険を冒すだけの価値があるのかどうか、というものであった。若き提督の返答は否であった。

時を置かず一二月二三日に特別委員会で皇帝臨席の下に対馬問題が検討された。<sup>(33)</sup> 外務大臣ゴルチャコフ公爵は強く反対意見を述べた。大公はリハチヨフを擁護した。他の参加者からの発言はなかった。アレクサンドル二世は昨夜と同じ質問を再びした。対馬問題で危険を冒す価値がロシアにとってあるのかどうかと。皇帝がこの質問をした後、対馬への海軍基地設置を断念することが決議された。その一方で、太平洋艦隊の新司令長官に対して次のような指令が出された。「イギリス人の行動を監視すること。もし彼らがツ・シマ島に停泊地を建設した場合は、そのことを我々および箱館にいる我が国の領事に知らせること。もし日本人が、侍従武官ビリレフがツ・シマ島にしたような種類の建築物を我が国の港に建てることを望むのであれば、我々はその権利を日本人に喜んで供与するであろう」。<sup>(34)</sup> 後にイヴァン・フォードロヴィチは次のように記している。「我々が達成したことは、この島をイギリスに占拠させなかったことのみかもしれない。香港の状況、あるいは一八八五年彼らがポート・ハミルトン【巨文島】を占拠したことに注目するならば、想定される事態は決してあり得ないことではない」。<sup>(35)</sup>

「第三九三号

サンクト・ペテルブルグにあられる皇帝陛下は、一八六二年一月八日、以下の命令をお出しになられた。

海軍元帥閣下の膝下にして、海軍教育委員会ならびに海軍建艦技術委員会委員、侍従武官イヴァン・リハチヨフは、家庭の事情により今後六ヶ月、帝国内および外国において、休暇扱いとする。」

休暇はリハチヨフの意に反して一〇月初めまで続き、その後彼はすべての職務を解かれ、「療養」先に送られた。

しばらくして皇帝は、失寵した提督を「病氣」を理由に、サンクト・ペテルブルグから離れた所で「健康を回復する」ために、長期休暇に入らせた。

「第四三四号

ガツチナにあられる皇帝陛下は、一八六二年一〇月八日、以下の命令をお出しになられた。

海軍元帥閣下の膝下にして、海軍教育委員会ならびに海軍建艦技術委員会委員、侍従武官イヴァン・リハチヨフを、病氣療養のため外国で一年間休暇扱いとし、その職務から任を解き、予備役に編入する。

署名者：海軍省長官、侍従武官長 N・クラツベ」<sup>(36)</sup>

一方、I・F・リハチヨフの庇護者で擁護者である大公は、一八六二年五月の終わりに、ポーランド情勢に関連して現地の行政強化に当たるためポーランドに派遣された。

「第四一五号

ツァールスコエ・セローにあられる皇帝陛下は、一八六二年五月二七日、以下の命令をお出しになられた。

大公・海軍元帥閣下を、皇帝陛下ご名代として、陛下のご管轄であるポーランド王国の総督に、同王国駐留軍司令長官の資格で、任命する。ただし、海軍元帥の称号はそのままとする。

署名者：海軍元帥コンスタンチン」<sup>(37)</sup>

リハチヨフは、課された任務を可能な限りうまく迅速に成し遂げ大公の望みを叶えようと努力し、自己に課された全権の枠を越えてしまう。だが、対馬島に海軍基地を造る試みは広く政治的共鳴を得た。この事件

は海軍の取引の性格を持つよう置換され、外務大臣であるゴルチャコフ公爵は、リハチヨフの言葉を引き、島に海軍基地を造る考えを断念せざるを得なくなった正当性を「ここから政治問題を引き出さず、何よりもこれにより日本人と争いは起こさないために」と示した。

イヴァン・フォードロヴィチが何よりも目指したのは、イギリス人による島の占拠は許容しない、ロシア海軍の艦艇が太平洋および南方海域へ出ていくための艦艇間の連絡が遮断されることは許さない、ということだった。彼は、極東におけるロシアの版図においてセヴァストポリの轍を踏むことはしたくなかったのである。これに関連して我々は、ロシアに対して決して肯定的ではなかった米国の歴史研究者レンセンの意見に賛成しないわけにはいかない。彼はその著書の中で、特にロシアが日本に対して抱いていた興味は当初は専ら商業的なものであったが、英、米、仏、その他のヨーロッパ諸国が中国および極東に進出をし始めてからは、ロシアは対日関係を政治的および軍事的観点から見ようになった、と述べている。<sup>38)</sup>この意見に我々として更に付け加えるならば、そのことがロシアをして、極東におけるその版図への予想され得る侵入に対して予防措置をとることを余儀なくさせたのである。

一八六三年八月八日、失寵の身にあった提督は現役に復帰となる。彼はバルト海のクリッパ艦隊の司令官に任命された。そして一八六七年には英仏への駐在武官に任命された。

一八八二年I・F・リハチヨフに対して海軍技術委員会の長を務めるようにとの提示があった。イギリスとフランスでの長期にわたる駐在武官としての仕事に裏打ちされた彼の豊富な経験が考慮されたもので、それらの国々で最新の成果をその目でよく知り得たことからすれば、委員会の長への任命は予想されたことで、予め決定済みのことのように見えただ。しかしながら、委員会の代表としての自分が実質的に何ら重大な権

限を付与されないものであることを確信した彼は、個人的には、強力な海軍の創出を促進するために陸軍の参謀本部に類した管理組織を設けることを念願していた。リハチヨフは五七歳の時海軍中将の身分で退役となった。退役に際して彼は次のような言葉を残している。「一八八三年に退役、それまでの勤務に対する報償は、私にとつては反動と道徳的低下あるいは『鈍化』としか思えなかつた宿命的かつ犯罪的行為への恒常的関与から解放されたという私的感慨以外の何ものでもなかつた」<sup>39)</sup>。

パリに去つた彼は、家族は持たず、相当の年金を得て、持てる時間を使い学術活動に没頭した。その成果を彼は『海軍雑誌』【'Морской Сборник'】、『クロンシュタット報知』【'Кронштадтский Вестник'】、その他で公にした。もはや服従と規律の枠に縛られることのない今、彼はロシア海軍の不備を公然と批判した。だが、その批判は常に建設的な性格を持ち、現存する不備の是正に向けられたもので、無責任な言明ではおよそなかつた。その一例として、大公・元帥に宛てた彼の報告を挙げることができる。この報告は、一八六二年に日本使節団をドイツからロシア（クロンシュタット）に運ぶ際に運航を開始した軍艦スメーリイ号の建造が遅滞している真の原因を知りたいとの大公の要請に対してのもので、以下その一部のみを抜粋する。

「現在の体制では工場に飛躍的な進展を期待することは出来ません。労働者が受け取っている賃金はごくわずかで（海軍労働者の給与は一昼夜三コペイカで…）、これでは仕事の進展を期待することは無理です。…或る退職労働者がプチロフ【の工場】に就職した時の給与は一二〇〇ルーブル、それ以上の報償を出すための資金は工場長にはありません。…製造量を決定する基準は何もなく、工場が何らかの作業を遂行できるかどうかを決定する人間は誰もいません。ところが、次から次へと、しかも工場の能力を越える量の作業指令が常に下され、より急を要する要

請をみたすために、どの仕事を選び、どの仕事を先送りするかを選ぶことで工場長は精一杯で何もできない状態です。工場創設以来工場長は何人か交代しました。彼らは皆立派な人間たちの中から選ばれています。彼らが満足したことはこれまで一度もありませんでした。すなわち、体制そのものに然るべき不備があります<sup>(40)</sup>。

そして更に、その具体的な原因と不備を是正する手段が示されている。I・F・リハチヨフは海軍について考え続けた。一八八八年雑誌「ロシア海運」【“Русское судоходство”】第二四号に「海軍軍令部の役目」と題した長大な論文が著者名無記で掲載された。彼の考えは当時のロシアでは耳を傾けられることもなく、それが実現されたのは彼の死後であった。

I・F・リハチヨフは、ロシア地理学協会（一八五三年から）、フランス地理学協会（一八七九年から）、モスクワ農業協会（一八六〇年から）、国際海事調停員会（一八八六年から）の会員であった。

一八九四年彼は自分の学術蔵書を海軍幼年学校に寄贈した<sup>(41)</sup>。寄贈に当たりイヴァン・フォードロヴィチは自己の行為の理由を次のように記している。「寄贈の理由は私自身海軍幼年学校の卒業生の一人であり、私が何らかのを知っているとすれば、その知識すべては海軍幼年学校のおかげであるからである<sup>(42)</sup>」。海軍大学校長兼海軍幼年学校長は次のように述べている。「深く尊敬するイヴァン・フォードロヴィチ・リハチヨフ提督がその蔵書を海軍幼年学校に寄贈された志に深い喜びと満足を感じた。この寄贈は海軍幼年学校にとってもまた海軍大学にとってもこの上なく有益なものとなる<sup>(43)</sup>」。

リハチヨフは、考古品収集家と古銭収集家であった弟のアンドレイ・フォードロヴィチ・リハチヨフを記念した博物館をカザンに設立することを主導した。カザン市長セルゲイ・ヴィクトロヴィチ・ジアチュ

ンコに宛てた書簡の中で彼は、亡き弟アンドレイ・フォードロヴィチの博物館（A・F・リハチヨフ博物館）設立のために三万ルーブルを寄付したと記している。「私の亡き弟の妻は：絵画ギャラリーおよび膨大な蔵書を含めて、弟が残した学術的および芸術的収集品をすべてそのままのために譲ることを約束した。：一言で言えば、弟の精神的遺産を構成するもの、あるいはそれと見なしうものすべてである。：私は、博物館のために内部構造と調度品共に、その目的にふさわしい部屋を用意する義務を市が引き受けること、この博物館が以後「A・F・リハチヨフ博物館」の名の下に一つの独立したものを構成し、市が所有する他の博物館、収集品、施設に紛れることが決してないことをひとえに希望する<sup>(44)</sup>」。その後イヴァン・フォードロヴィチは更に一万四千ルーブルを寄付した<sup>(45)</sup>。博物館は、カザン市科学芸術博物館が入っている外商商館【Торговый ряд】<sup>(46)</sup>の建物の一部に置かれた。そこには絵画だけで四三五点が引き渡された。さらに中国の陶磁器、東洋の貨幣コレクションが展示された。この博物館は現在のタタール共和国博物館の基礎を成している。

市長はI・F・リハチヨフに次のように伝えた。「市議会は、貴下に対する深い感謝の念に満ち、貴下に対する敬意を市民に示すことを願い、非公開投票でもって全員一致で貴下を貴下の生まれた町の名誉市民に選出し、貴下により為された寄付に対して、議会の名において貴下に個人的に謝意を表するよう私に依頼しました<sup>(47)</sup>」。

一九〇七年一月一六日、日露戦争でのロシアの敗北から受けた衝撃から癒されないうまま、海軍中将イヴァン・フォードロヴィチ・リハチヨフはバリーで八一歳の生涯を閉じた。遺体は故国に運ばれ、スヴィヤジスク修道院に葬られる。残念ながら墓は保存されていない。

（翻訳：有泉和子）

[注]

- (1) 保田孝一『文久元年の対露外交とシーボルト』一九九五、保谷徹「オーロックは対馬占領を言わなかったか——一八六一年ポサドニック号事件における英国の対応について」『歴史学研究』第七九六号、二〇〇四年、一六—二二頁。他日本の研究者による著作。それ以外に昨年史料編纂所において宮地正人教授・有泉和子等による素晴らしい報告が行われた。
- (2) Файнберг Э.Д. Русско-японские отношения в 1697-1875 гг. М., 1960. С. 193-197. Кутаков Д.Н. Россия и Япония. М., 1988. С. 144-145. Черевко К.Е. Россия на рубежах Японии, Китая и США (2-я половина XVII - начало XXI века). М., 2010. С. 314-316. ただし、このテーマに関しては、ロシア歴史家の著作目録はぐくろ挙げては足りなほごである。
- (3) Русский биографический словарь. Лавзина - Дяченко. СПб., 1914. С. 480-482.
- (4) 基本的に日付はユリウス暦、露暦。
- (5) Там же, с. 495-496.
- (6) Там же, с. 483-485.
- (7) РГА ВМФ. Фонд 432, опись 5, дело 3719. Д. 1.
- (8) Там же, л. 1-1 об.
- (9) Там же. Д. 5.
- (10) Там же. Д. 2.
- (11) Там же. Д. 2.
- (12) Энциклопедический словарь Брокгауз и Ефрон: Биографии. В 12 томах: т.6. М., 1997 (репринтное издание). С. 736-737.
- (13) Общий морской список. Часть X. Царствование Николая I. Д. - М. Санкт-Петербург, 1898. С. 588.
- (14) Брейд-вымпел 艦頭旗、将官旗(オランダ語「breed-wimpel」より)。幅広の艦頭旗のつら。艦隊あるいは分艦隊司令長官の艦頭旗。海戦における先任指揮官の艦頭旗も指す (Морской энциклопедический словарь. В трех томах. Т. 1, А-И. СПб., 1991. С.174)。この職掌旗は指揮官が在艦していることを意味する。この先任職務旗が掲げられている艦は旗艦といひ、他の艦は旗艦から発せられる信号を必ず遂行しなくてはならない (Морской энциклопедический словарь. В трех томах. Т. 3, Р-Я. СПб., 1994. С. 332)。
- (15) Общий морской список. Часть X. Царствование Николая I. Д. - М. Санкт-Петербург, 1898. С. 588-591.
- (16) РГА ВМФ. Фонд 16. Опись 1. Дело 15. Дл. 1-2 об.
- (17) Морской энциклопедический словарь. В 3 томах. Т. 2. М., 1993. С. 215.
- (18) Болгуев Б.Н. Забытый адмирал/Тангут. Выпуск 16, 1998.
- (19) Петроф, Арек Сандол・イワノヴィチ(一八二八—一八九九)海軍少将、極東探検家。一八五二—一八五五年ネヴェリスコイの指揮下アムール川とアムール湾の調査を行う。一八五六年ニコラエフスク港湾長官。一八五七—一八六三年アムール会社所有船やシベリア小艦隊、一八六三年バルト海艦隊勤務。Санкт・Пetersburg、Смоленск 墓所埋葬。
- (20) ラズグラツキー、グリゴリー・タネーロヴィチ(一八三〇—一八九九)海軍中佐。一八五二—一八五六年アムール、アムール・リマンを調査。ネヴェリスコイのアムール探検隊の一員。サハリンのアレクサンドル、マリインスク、ムラヴィヨフ各哨所、アムールのウスチ・ストレロク哨所各隊長。一八五八—一八五五年蒸気コルベット艦アメリカ号勤務、スクーター艦ボストーク号艦長。極東勤務は一五年に及ぶ。
- (21) Невельской Г.И. Подвиги русских морских офицеров на крайнем востоке России. 1849-1855. М., 2009. С. 165.
- (22) Неофициальный отдел. Вице-адмирал Иван Федорович Лихачев. (К пятилетию со дня смерти) 1907 15/ХI 1912/ Морской сборник, издаваемый под наблюдением Морского Генерального Штаба. И.Д. Редактора - лейтенант Житков. Том СССР XX, № 11, ноябрь. Санкт-Петербург, 1912. С. 6.
- (23) Житков К. Вице-адмирал Иван Федорович Лихачев и его работа "Служба генерального штаба во флоте". Санкт-Петербург, 1912. С. 7.
- (24) Указ. соч. С. 8.
- (245) リハチヨフ、イヴァン・フョードロヴィチ(一八二六—一九〇七)「艦隊司令長官、学者、人間」(クリモフ)

- (25) Неофициальный отдел. Вице-адмирал Иван Федорович Лихачев. (К пятилетню со дня смерти) 1907 15/XI 1912// Морской сборник, издаваемый под наблюдением Морского Генерального Штаба. И.Д. Редактора - лейтенант Житков. Том СССLXX, № 11, ноябрь. Санкт-Петербург. 1912. С. 9-12.
- (26) 138. Господину военному губернатору Приморской области и командиру Сибирской флотилии и портов Восточного океана, контр-адмиралу Казакевичу. (1859 г., 15-го ноября, № 279, Благовещенск.) // Граф Николай Николаевич Муравьев-Амурский по его письмам, официальным документам, рассказам современников и печатным источникам. (Материалы для биографии). Ивана Барсукова. Книга 2. М., 1891 г. С. 294.
- (27) 145. Господину военному губернатору Амурской области. (1860 г., июня 15-го. № 585, Иркутск.) // Граф Николай Николаевич Муравьев-Амурский по его письмам, официальным документам, рассказам современников и печатным источникам. (Материалы для биографии). Ивана Барсукова. Книга 2. М., 1891 г. С. 294.
- (28) РГВМФ. Фонд 16. Опись 1. Дело 51. Лл. 1-1 об.
- (29) Сборник пограничных договоров, заключенных с соседними государствами. Издано по распоряжению г. министра иностранных дел. С.-Петербург, 1891. С. 200-210.
- (30) Неофициальный отдел. Вице-адмирал Иван Федорович Лихачев (К пятилетню со дня смерти) 1907 15/XI 1912// Морской сборник, издаваемый под наблюдением Морского Генерального Штаба. И.Д. Редактора - лейтенант К. Житков. Том СССLXXIII. № 11, ноябрь. С.-Петербург. 1912. С. 15.
- (31) Там же. С. 19-20.
- (32) В дореволюционной России рассмотрена деятельность И.Ф. Лихачева по занятию острова А. Беломором в статье “Тсу-симский эпизод” в журнале “Русский Вестник” за 1897 г., № 4 и № 5.
- (33) РГВМФ. Фонд 1191, опись 1. Дело 43. Л. 6-8 об.
- (34) Там же. Л. 7-7 об.
- (35) РГВМФ. Фонд 16, опись 1, дело 71. Л. Цит. по: Файнберг Э.Я. С. 197.
- (36) Приказы по личному составу 1862 г. - РГВМФ, библиотека, Д - 741.
- (37) Там же.
- (38) Lensen, George Alexander. Early Russo-Japanese Relations// The Far Eastem Quarterly, Vol. 10. No. 1 (Nov., 1950). P. 37.
- (39) Цит. по: Болгурицев В.Н. Забытый адмирал// Гангут. Выпуск 16, 1998.
- (40) РГВМФ. Фонд 16. Опись 1. Дело 43. О причинах медленного хода работ по достройке в Кронштадте фрегата “Смелый” (расследование, проведенное Лихачевым И.Ф. по поручению генерал-адмирала). Лл. 78-79.
- (41) РГВМФ. Фонд 16. Опись 1. Дело 14. Лл. 1-4.
- (42) Там же. Л. 2.
- (43) Там же. Л. 3.
- (44) РГВМФ. Фонд 16, опись 1. Дело 13. Лл. 1-1 об.
- (45) Там же. Л. 7 об.
- (46) Там же. Л. 11.
- (47) Там же. Л. 3 об. -4.